

大学女子ハンドボール競技のセットディフェンスにおける 有効な1対1防御プレー方法

加納 明帆 (201111844、ハンドボール方法論)

指導教員：會田 宏、藤本 元、山田 永子

キーワード：突破阻止の成否、記述的ゲームパフォーマンス分析

【目的】

セットオフェンスにおける均衡打破局面では、1人で突破する動きが最も多用されていることから、対峙する目の前の相手を1人で守りきる防御力を高める必要があると考えられる。本研究では、セットディフェンスにおける有効な1対1防御プレー方法すなわち、攻撃プレーヤーに継続局面やシュート局面に移行されない1対1防御プレーについて明らかにし、コーチングの現場に有用な知見を導くことを目的とした。

【方法】

対象は平成 26 年度関東学生ハンドボール女子春季リーグ戦の、上位 5 チーム同士が互いに対戦した 10 試合の 129 場面であった。

1対1防御におけるプレー状況として①ディフェンス隊形、②ディフェンスエリア、③ディフェンスエリア内でのポストプレーヤーの有無、④マークする攻撃プレーヤーの利き腕を分析した。

パスナーがボールを保持している局面（第1局面）とボールが空中を移動している局面（第2局面）では①移動範囲、②注意を向けている攻撃プレーヤー、③前後への動き、④左右への動きを、マークする攻撃プレーヤーがボールを保持している局面（第3局面）では、①マークする攻撃プレーヤーがボールを保持した瞬間の位置、②前後への動き、③左右への動き、④相手への対応方法を分析した。1対1防御におけるプレー結果として①突破阻止の成否、②最終プレーを分析した。統計処理にはカイ 2 乗検定と残差分析を用いた。

【結果と考察】

(1) 突破阻止の成否と1対1防御におけるプレー状況との関係から、味方ゴールを背にした時の左側のディフェンスエリアでの1対1は、右側での1対1に比べて突破阻止の失敗が多いこと、左利き攻撃プレーヤーより右利きプレーヤーの1対1は突破阻止の失敗が多いことが明らかになった。防御プレーヤーは左側での、また右利きに対する1対1防御プレー方法の習熟が要求されると考えられる。

(2) 最終プレーと1対1防御におけるプレー状況との関係から、6-0 ディフェンスよりもそれ以外のディフェンスの方がプレーの中断・ボールの奪取を行いやすいこと、6-0 ディフェンスはそれ以外のディフェンスよりもディスタンスシュートを打たれやすいことが明らかになった。また、ディフェンスエリアの左側ではカットインシュート、中央ではディスタンスシュート、右側では中断・奪取が多く行われていたこと、ディフェンスエリア内にポストプレーヤーがいるとディスタンスシュートを打たれやすいことが明らかになった。防御プレーヤーは、防御隊形、エリア、状況において起こるプレーの特徴を考慮して1対1防御プレー方法を習熟させる必要があると考えられる。

(3) 突破阻止の成否と1対1防御のプレー方法との関係から、突破阻止の成功に影響するプレー方法は、第1局面と第2局面における前につめるプレー、第3局面における積極的に相手を遮断するプレーであることが明らかになった。第1局面において、攻撃プレーヤーとある程度の距離を保ちながら準備し、その後積極的な対応をすることが突破阻止の成功に繋がると考えられる。

表 1 突破阻止の成否と第3局面における相手への対応方法との関係

	阻止成功	阻止失敗
積極的防御	32(53.3%) *	16(23.3%) #
反動的防御	28(46.7%) #	53(76.7%) *
合計	60(100.0%)	69(100.0%)

カイ 2 乗値=12.5, $p < 0.05$

*: 有意に多い($p < 0.05$), #: 有意に少ない($p < 0.05$)

【実践への提言】

突破阻止に有効である積極的なディフェンスを行うために、いずれのエリア、状況においても、攻撃プレーヤーの意図を観察、予測し、間合いをつめ、後ろに下がらないような防御プレー方法を身につける必要があると実践現場に提言できる。